〔論 文〕

中学・高校時代の生徒会活動及び部活動がリーダーシップに及ぼす影響について

―PROG テストのデータを用いて―

Influence of leadership skills acquired through student council and club activities in junior high school and high school using PROG test data

洲　　雅　明

Suga Masaaki

大分県立芸術文化短期大学

研究紀要　第54巻

2017年3月

〔論　文〕

中学・高校時代の生徒会活動及び部活動がリーダーシップに及ぼす影響について

―PROGテストのデータを用いて―

Influence of leadership skills acquired through student council and club activities in junior high school and high school using PROG test data

洲　　雅　明
Suga Masaaki

Abstract

This study examines the nature of leadership skills acquired through leadership experiences in junior high school and high school by measuring generic skills using the Progress Report on Generic Skills test. The subjects were 218 freshmen in the 2015 and 2016 batches of the Department of Information and Communication, Oita Prefectural College of Arts and Culture. The two elements of generic skills, literacy and competency, were compared according to each category of leadership experience including student council activities, participation in club activities, and the role of club activities.

For the literacy element, there were no significant differences among the student council activities, participation in the club, and the role of club activities.

For the competency element, however, there were significant differences among the "synthesis," "affinity," "collaboration," and "confidence creation" abilities with regard to student council activities. Experienced students tended to score higher than those with no experience. There were significant differences among the "synthesis," "affinity," "collaboration," and "confidence creation" abilities with regard to participation in the club. Sports club members tended to score higher than culture club members. It seems that the competitive element, a characteristic of sports clubs, influences them. There were significant differences among the "synthesis," "collaboration," and "leadership" abilities with regard to the role of club activities. Captains and vice-captains tended to score higher than general club members.

In this way, it is assumed that students acquire the "fundamental ability for human" and the "fundamental ability for own" through leadership experiences in junior high and high schools. However, the results suggest that it was difficult for students to acquire the "fundamental ability for tasks" through leadership experiences in both junior high and high schools.

キーワード：リーダーシップ，ジェネリックスキル，リテラシー、コンピテンシー，
PROGテスト

１．はじめに

近年までリーダーシップ研究は様々な角度から行われており、３つのリーダーシップパターンを設定し特徴を観察したレヴィンら、組織変革を実現する「変革型リーダーシップ」のコッター、「カリスマ的リーダーシップ」のマックスウェーバー、さらに「サーバント（奉仕型）リーダーシップ」のグリーンリーフなどが代表的である[11)15)]。国内においても、目標達成（P）行動と集団維持（M）行動からリーダーシップの行動特性をPM理論として明らかにした三隅二不二（1986）[5)]が先駆的な研究を行っている。それらの理論はスポーツ界、産業界にも応用され、集団や組織に適用する修正が加えられ実証的な研究もおこなわれてきた[1)]。野球、サッカー、ラグビーなどのスポーツの監督は優勝するとその手腕がクローズアップされ、ビジネスなど多方面の人材育成面にも影響を及ぼしている。リーダーシップの定義に関しては、完全に一致した見解を導き出すのは難しいとされているが、小野（2013）[11)]は、コッターらの理論を用いて、「人々の心を一つにする働きかけのことである」、リーダーとフォロワーの関係において、「フォロワーに意識の変化を積極的に促す行為である」と述べている。

中学・高校時代においては、生徒会活動やその下部組織として学級活動が行われる。生徒会活動においては、会長をトップとし副会長や専門委員会の委員長で構成され、学級活動としては学級委員長や専門委員で構成される。また、授業以外の課外活動では学校の規模や施設設備、顧問教員の有無に応じて、運動系、文化系の部活動が実施されている。生徒会活動や部活動における問題点はあるものの、岡田（2009）[9)]は活動している生徒の社会的適応の高さについて、横井（2011）[17)]は生徒の部活の種類やかかわり度合が高いと自己効力感が高まると述べている。

先に述べたリーダーシップとの関連でいえば、生徒会活動や部活動において、構成員の中心として目標や目的を達成しようとする場合、様々な環境の下でリーダーシップが必要となる。大森ら（2005）[10)]は、生徒会会長・副会長経験者は高いリーダーの資質を有していることを明らかにしている。また深山（2012）[1)]は、様々な産業界とともに、スポーツ活動などの部活動においてもリーダーシップ理論が応用されていると述べている。

近年、「社会人基礎力」（経済産業省）や「学士力」（中央教育審議会答申）、あるいは「就業力育成支援事業」（文部科学省主導）などで提唱されているように、現代の変化の激しい時代を生き抜くためには、あらゆる職業を超えて活用できる移転可能なスキル（汎用的技能）であるジェネリックスキルの育成が求められている[12)13)]。このような流れの中、ジェネリックスキル（社会人力）を測定し数値化するためのテストとして、学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発した PROG（Progress Report on Generic Skills)テストが2012年にリリースされた[3)7)12)13)]。このテストの目的は、専攻・専門に関係なく、大卒者として社会に求められる能力、態度、志向を測定し、育成することである。結果を数値で出して可視化し、客観的評価の指標を設けることで、教育成果の検証を行うことが可能となる。PROGでは、基礎力を「リテラシー」と「コンピテンシー」の二側面から測

定している。リテラシーは、経験のない問題に対して今までの知識を基に問題を解決する力で、知識の活用力や学び続ける力の素養をみるものとして以下６項目で構成されている。

・情報収集力：課題発見・課題解決に必要な情報を見定め、適切な手段を用いて収集・調査、整理する力
・情報分析力：収集した個々の情報を多角的に分析し、現状を正確に把握する力
・課題発見力：現象や事実のなかに隠れている問題点やその要因を発見し、解決すべき課題を設定する力
・構想力：さまざまな条件・制約を考慮して、解決策を吟味・選択肢、具体化する力
・言語処理力：語彙や同意語、言葉のかかり受けなど、日本語の運用に関する基本的な能力
・非言語処理力：数的処理や推論、図の読み取りなど、情報を読み解くために必要な（言語以外の）基礎的な能力

コンピテンシーは、以下のように「対人基礎力」「対自己基礎力」「対課題基礎力」の３領域の大項目に各３項目ずつの中項目、その下に計33の小項目（記載省略）から構成されている。経験から身につけた意思決定、行動指針などの特性で、社会人として役立つ必要な能力の素養をみるものである。

＜対人基礎力＞
・親和力：多様な考えを受け入れ、相手の立場に立って考えることで信頼を引き出し人間関係を築いていく力
・協働力：周囲と情報を共有し、周りの「やる気」を引き出して協力して課題に取り組み、またリーダー的立場からメンバーを指導し、チームや後輩の意欲を高めていく力
・統率力：異なる意見にも耳を傾ける一方で、自分の意見も主張しながら交渉や討議を建設的に進めていく力

＜対自己基礎力＞
・感情制御力：ストレスのかかる場面でも自分の気持ちや感情を把握したうえで状況を前向きにとらえ、困難に挑戦していく力
・自信総出力：自分の強みや弱みといった自身の特徴を理解し、自分に自信をもっていると同時に、機会をとらえて自分を向上させようとする力
・行動持続力：自分なりのルールや決まりをつくりながら、最後まで粘り強く責任をもって物事に取り組んでいく力

＜対課題基礎力＞
・課題発見力：さまざまな角度から適切な情報源と手段で情報を収集し、広い視野から現象や事実をとらえ、そのメカニズムや原因について考察して解決すべき課題を発見する力
・計画立案力：さまざまな条件・制約を考慮しながら問題解決までのプロセスを構想し、その過程で想定されるリスクや対処方法を構想する力
・実践力：目標達成に向けて自ら行動し、予測した先行きに合わせて全体の動きを調整しながら早めに行動を修正し、実行する力

国内のいくつかの大学でも PROG テストを利用し、学生の社会人力を測定している。山﨑ら（2014）[16]による北九州市立大学地域創生学群の学生の１年間のコンピテンシーの変化、笹川（2015）[14]による長崎大学経済学部のリテラシー向上分析や能力伸長分析、亀野（2016）[2]による北海道大学学生の属性別分析などが PROG テストを用いた研究として報告されている。

先行研究で明らかにされているリーダーシップやスポーツ及びビジネスなどの現場で発揮されるリーダーシップは、PROG テストのコンピテンシー項目に通ずるものがある。小野ら（2013）[11]は、リーダーシップは「人々の心を一つにする働きかけ」であること、コッターらの変革型リーダーシップでは「フォロアーに意識の変化を積極的に促す」こと、コンガーとカヌンゴのカリスマ的リーダーでは「フォロアーの気持ちを察する」ことなど、それらの内容は、コンピテンシー中項目の「親和力」「協働力」に関係すると思われる。また、三隅（1986）[5]の目標達成（P）と集団維持（M）におけるリーダーシップの発揮について研究した PM 理論は、大項目の「対課題基礎力」「対人基礎力」に関係してくる。このように、これまでに報告されてきた数々のリーダーシップ論は、言葉や表現は違うもののコンピテンシーの項目に当てはまると思われる。

大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科（以下「本学科」とする）では、2015年から実施している PROG テストにより学生のジェネリックスキルを測定している。この結果を利用して、中学・高校におけるリーダー経験がリーダーの要素や資質として身についているかを検討することを本研究の目的とした。

２．調査方法

１）分析対象者：本学科の2015年入学生134名と2016年入学生109名の計243名のうち、以下３）及び４）の両方を完了した230名（2015年128名、2016年102名）とした。男性が2015年に17名、2016年に９名に含まれる。

２）実施時期：2015年５月及び2016年５月

３）中学校及び高校時代の各種活動に関する調査の内容：

次の(1)～(3)においてどのような役割や活動を行っていたか、中学校と高校別に回答してもらった。

(1)生徒会活動や学級委員の経験（会長、書記などの執行部、専門委員会委員長、体育祭や文化祭の実行委員、学級委員長など）

(2)部活動の内容（部活動名）

(3)部活動における役割（部長、主将、副部長、副主将、部員など）

４）PROG テスト：

(1)リテラシーテスト

テストの要項に従い、30問のマーク及び記述式テストを45分間で実施した。採点はリアセック社が行い、各個人の総合点は７点満点、６つの下位項目は５点満点で評価が行われる。

(2)コンピテンシーテスト

リテラシーテストに続き、251問（両側選択方式195問、場面想定形式（短文）50問、場

面想定形式（長文）６問）のマーク式テストを40分間で実施した。採点はリアセック社が行い、各個人の総合点、大項目、中項目ともに７点満点で評価が行われる。

５）各種活動とジェネリックスキルの比較：

(1)生徒会活動や学級委員の経験については、これらの役割のいずれかを「中学・高校を通して経験（中高で経験)」「中学・高校どちらかで経験（どちらかで経験)」「中学・高校どちらでも経験なし（経験なし)」に分類した。

(2)部活動の内容については、運動部、文化部、無所属に分類し、さらに「中学・高校ともに運動部（運動部)」「中学・高校ともに文化部（文化部)」「中学・高校のどちらかで運動部又は文化部（両方経験)」「中学・高校を通じて無所属（無所属)」に分類した。

(3)部活動における役割については、運動部と文化部の区別は設けず、中学・高校のいずれかで部長(主将)又は副部長(副主将)を経験したものを「部長・副部長」、役職をまったく経験していない部員を「一般部員」、部活に所属していなかったものを「無所属」に分類した。

各種活動別に、リテラシー（総合＋６項目）とコンピテンシー（総合＋３大項目＋９中項目）テストの平均値を分類ごとに算出し、特徴を検討した。

６）統計

統計分析には PASW Statistics 17.0 for Windows を使用した。各種活動調査についてはそれぞれ該当数と割合（%）を、入学年度別及び各種活動別のジェネリックスキル項目の得点は平均値±標準偏差で示した。入学年度別の比較においては対応のないｔ検定を、各種活動別の比較において一元配置の分散分析及び多重比較を行った。有意水準は５%未満とした。

３．結果と考察

１）中学・高校時代の各種活動の役割や内容

(1)生徒会活動や学級委員の経験について

表１－１の通り、中学・高校を通して生徒会活動や学級委員を経験したことがある（中高で経験+どちらかで経験）のは、2015年で71%、2016年で82%であった。

また表１－２の通り、中学、高校別に活動内容を詳しくみると、専門委員会の割合が３割前後と活動の中心を多く担っており、会長を含む執行部は１割程度であった。大森ら（2005)[10]の研究における国立大教員養成課程の大学生448人の調査で、中学生徒会（会長及び副会長）経験者が14%であったことと比較してみても、本研究における生徒会執行部（書記、会計なども含む）は2015年が13%、2016年が11%と少なくないと思われる。このように、本学科の学生は多くが中学・高校で生徒会活動等のリーダーの経験があり、リーダーシップを発揮する機会があったと考えられる。

表１－１　本学科学生の生徒会活動や学級委員の経験者数

	2015 年	2016 年	総計
中高で経験	54(42%)	56(55%)	110(48%)
どちらかで経験	37(29%)	28(27%)	65(28%)
経験なし	37(29%)	18(18%)	55(24%)
総計	128(100%)	102(100%)	230(100%)

表１－２　本学科学生の生徒会活動や学級委員の役割者数

	中学			高校		
	2015 年	2016 年	総計	2015 年	2016 年	総計
生徒会執行部	16(13%)	11(11%)	27(12%)	12(9%)	11(11%)	23(10%)
専門委員会	38(30%)	41(40%)	79(34%)	29(23%)	29(28%)	58(25%)
実行委員会	7(5%)	12(12%)	19(8%)	12(9%)	18(18%)	30(13%)
学級委員長	13(10%)	11(11%)	24(11%)	18(14%)	7(7%)	25(11%)
役割なし	54(42%)	27(26%)	81(35%)	57(45%)	37(36%)	94(41%)
総計	128(100%)	102(100%)	230(100%)	128(100%)	102(100%)	230(100%)

(2)部活動の経験について

表２－１に示す通り、中学、高校を通して2015年度が95%、2016年度が92%とほとんどが部活動に所属していた。

西島ら（2006）[8)]の１都６県（4206名）の中学生、１都２県（4784名）の高校生を対象とした調査では、部活動への加入率が中学で87.8%、高校で68.0%であると報告している。表２－２に示す通り、本学科は中学で87%とこれと同等、高校で81%とそれ以上であった。また中学で３割が、高校で６割が文化部に所属していると報告しているが、本学科でも無所属を除くと中学では27%、高校では57%が文化部に所属していることになり、似たような傾向を示している。部活動の内容としては中学・高校ともにソフトテニス、卓球、吹奏楽、美術などへの所属が多かった。どちらの年も中学では運動部への所属率が高いが、高校では文化部に変わるケースもみられた。西島ら（2006）[8)] が指摘しているように、中学で運動部に所属していたのに、高校では友達と過ごす場を求めて文化部に所属していたと考えられる。

表２－１　本学科学生の中学・高校における部活動の経験者数

	2015 年	2016 年	総計
運動部	56(44%)	36(35%)	92(40%)
文化部	36(28%)	27(27%)	63(27%)
両方経験	30(23%)	31(30%)	61(27%)
無所属	6(5%)	8(8%)	14(6%)
総計	128(100%)	102(100%)	230(100%)

表２－２　本学科学生の中学・高校における各部活動への所属者数

分類	中学部活名	2015 年	2016 年	総計	高校部活名	2015 年	2016 年	総計
運動部	ソフトテニス部	16	13	29	ソフトテニス部	8	3	11
	卓球部	10	13	23	サッカー部	5	4	9
	バレー部	8	10	18	弓道部	7	1	8
	陸上部	9	5	14	バスケ部	4	4	8
	バスケ部	6	6	12	バドミントン部	4	3	7
	テニス部	9	2	11	陸上部	4	1	5
	バドミントン部	4	5	9	剣道部	1	3	4
	サッカー部	5	3	8	卓球部	2	1	3
	剣道部	3	4	7	バレー部	3		3
	ソフトボール部	2	2	4	テニス部	2	1	3
	その他	9	3	12	野球部	1	1	2
	計	81（63%）	66（65%）	147（64%）	硬式テニス部	2		2
					ボクシング部	1	1	2
					ダンス部	1	1	2
					その他	5	6	11
					計	50（39%）	30（29%）	80（35%）
文化部	吹奏楽部	13	7	20	吹奏楽部	14	9	23
	美術部	11	6	17	書道部	4	8	12
	合唱部		4	4	美術部	7	4	11
	放送部	2	1	3	放送部	6	3	9
	音楽部	3		3	茶道部	4	4	8
	その他	4	3	7	演劇部	2	3	5
	計	33（26%）	21（21%）	54（23%）	JRC 部		4	4
					邦楽部		2	2
					文芸部	1	1	2
					食物部	1	1	2
					ユネスコ部	1	1	2
					ギター部		2	2
					OA 部		2	2
					JRC 部	2		2
					その他	12	8	20
					計	54（42%）	52（51%）	106（46%）
無所属		14（11%）	15（14%）	29（13%）		24（19%）	20（20%）	44（19%）
総計		128（100%）	102（100%）	230（100%）		128（100%）	102（100%）	230（100%）

※該当数1人の部活は「その他」で集計した。

(3)部活動における役割について

吉村（2005）[18]の研究によれば、部活動における部長（主将）の役割は、目標や課題克服のために部をまとめたり（集団内の人間関係の維持)、技術指導を行うことである。

表３に示す通り、本学科では中学・高校を通して部長又は副部長を経験したのが2015年で48％、2016年で41％と半数近くが経験していた。部の規模やレベルなどもあるが半数近くの学生が部活動で部長・副部長としてリーダーシップを発揮する機会があったと考えられる。

表３　本学科学生の中学・高校における部活動での役割者数

	2015 年	2016 年	総計
部長･副部長	61(48%)	42(41%)	103(45%)
一般部員	61(48%)	52(51%)	113(49%)
無所属	6(4%)	8(8%)	14(6%)
総計	128(100%)	102(100%)	230(100%)

２）入学年度別のジェネリックスキルの比較

表４に本学科学生の入学年度別のリテラシー及びコンピテンシーの得点を示した。２年間の合計（全体）の「リテラシー総合」は4.65±1.33、「コンピテンシー総合」は2.98±1.59であった。下位項目は表４の通りである。これら各項目の点数を、PROG白書2015[12]に掲載されている様々な属性別の点数のうち、最も本学科の対象と類似した属性である〈女性×文系〉（約24,000人）と比較を行ってみた。その結果、「リテラシー総合」で本学科が4.65±1.33なのに対し〈文系×女子〉は3.92であったのをはじめ、各項目ともに0.52～1.14本学科のほうが高く、リテラシー能力の高さが伺える。「コンピテンシー総合」で本学科が2.98±1.59なのに対し〈文系×女子〉は3.07、大項目の「対人基礎力」が3.27±1.75に対し3.41、「対自己基礎力」が3.23±1.43に対し3.30、「対課題基礎力」が3.35±1.60に対し3.34とほぼ同等の結果であった。

次に入学年度で比較してみると、「リテラシー総合」で有意な差（P<0.01）が確認された。中項目についてみると「課題発見力」(P<0.05)、「構想力」(P<0.001)、「非言語処理能力」(P<0.001）で有意な差が認められ、いずれも2016年のほうが2015年よりも高い値であった。この理由として、2016年は2015年に比べ一般入試による入学者数が25人少ないため、学力の下位層が少なく、そのことがリテラシーの成績に影響していることが考えられる。

コンピテンシーについては、有意な差は確認されなかった。リーダーシップにはコンピテンシーと深く結びつく内容が多いので、年度によるコンピテンシーの差はないと考え、各種活動における比較は年度では行わず、２年分を合算したもので行うこととした。

表４　本学科学生の入学年度別のリテラシー及びコンピテンシーの得点

項目	全体		入学年度別				t 値
			2015 年		2016 年		
該当数	230		128		102		
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
リテラシー総合	4.65	1.33	4.44	1.38	4.91	1.21	−2.71**
情報収集力	3.47	1.38	3.45	1.46	3.50	1.27	−0.30
情報分析力	3.43	1.29	3.55	1.25	3.27	1.33	1.59
課題発見力	3.87	1.05	3.73	1.00	4.03	1.09	−2.13*
構想力	3.86	1.25	3.46	1.37	4.36	0.84	−6.11***
言語処理能力	3.56	1.22	3.62	1.23	3.48	1.20	0.85
非言語処理能力	3.53	1.44	3.22	1.61	3.93	1.06	−3.84***
コンピテンシー総合	2.98	1.59	3.02	1.62	2.93	1.55	0.40
対人基礎力	3.27	1.75	3.29	1.79	3.25	1.68	0.15
対自己基礎力	3.23	1.43	3.31	1.47	3.14	1.37	0.92
対課題基礎力	3.35	1.60	3.35	1.53	3.35	1.68	−0.01
親和力	3.79	1.93	3.76	1.99	3.82	1.85	−0.26
協働力	3.53	1.83	3.48	1.87	3.59	1.77	−0.46
統率力	2.70	1.55	2.75	1.57	2.63	1.52	0.60
感情制御力	3.15	1.59	3.13	1.59	3.19	1.59	−0.29
自信創出力	3.20	1.55	3.27	1.63	3.11	1.43	0.80
行動持続力	3.34	1.53	3.47	1.60	3.18	1.42	1.44
課題発見力	3.13	1.65	3.06	1.60	3.22	1.71	−0.70
計画立案力	3.37	1.71	3.38	1.65	3.35	1.79	0.13
実践力	3.59	1.50	3.62	1.47	3.56	1.54	0.29

*:p<0.05　**:p<0.01　***:p<0.001

３）中学校及び高校での各種活動とジェネリックスキルとの比較について

(1)生徒会活動や学級委員の経験別の比較

表５に本学科学生の生徒会活動や学級委員の経験別のリテラシー及びコンピテンシーの得点を示した。生徒会活動や学級委員の経験が、「コンピテンシー総合」、対人基礎力の「親和力」、「協働力」、対人自己基礎力の「自信創出力」の群間で有意な差がみられた。「協働力」において〈経験者なし〉より〈中高で経験〉が、「自信創出力」において〈どちらかで経験〉より〈中高で経験〉が高い傾向にあった。生徒会活動等でのリーダー経験により、これらの能力が高まったと考えられる。大森ら（2005）[10]の研究で、生徒会活動を経験した大学生は生徒会生徒のリーダーとしての高い資質の内容として、集団に対して伝達や統率の方法である「表現力」を挙げている。また教師は「正義感」「行動力」を挙げており、本研究で生徒会活動等のリーダーを担ってきた学生が身についていると考えられる資質とは多少異なっていると思われる。これらについては、今後、生徒会活動等での取り組み内容なども検討していく必要があるであろう。

表５　本学科学生の生徒会活動や学級委員の経験別のリテラシー及びコンピテンシーの得点

項目	生徒会活動・学級委員の経験別							
	a)中高で経験		b)どちらかで経験		c)経験なし		F 値	多重比較
該当数	110		65		55			
	mean	SD	mean	SD	mean	SD		
リテラシー総合	4.76	1.27	4.42	1.39	4.69	1.35	1.43	
情報収集力	3.41	1.29	3.52	1.43	3.53	1.49	0.20	
情報分析力	3.55	1.25	3.26	1.27	3.38	1.38	1.02	
課題発見力	3.85	0.96	3.77	1.27	4.02	0.88	0.87	
構想力	4.04	1.20	3.72	1.30	3.67	1.25	2.11	
言語処理能力	3.46	1.26	3.55	1.18	3.75	1.15	0.97	
非言語処理能力	3.64	1.28	3.40	1.59	3.49	1.52	0.58	
コンピテンシー総合	3.25	1.56	2.68	1.64	2.78	1.49	3.31*	
対人基礎力	3.56	1.76	3.06	1.70	2.95	1.69	3.00	
対自己基礎力	3.45	1.52	2.97	1.35	3.13	1.24	2.50	
対課題基礎力	3.49	1.59	3.09	1.58	3.38	1.59	1.28	
親和力	4.13	1.86	3.45	1.97	3.51	1.89	3.35*	
協働力	3.85	1.84	3.32	1.82	3.11	1.70	3.67	a>c
統率力	2.87	1.50	2.55	1.62	2.51	1.52	1.39	
感情制御力	3.25	1.59	3.02	1.64	3.11	1.52	0.48	
自信創出力	3.46	1.64	2.77	1.36	3.18	1.44	4.21*	a>b
行動持続力	3.50	1.52	3.23	1.59	3.15	1.43	1.21	
課題発見力	3.23	1.64	2.85	1.67	3.27	1.62	1.35	
計画立案力	3.43	1.68	3.15	1.79	3.51	1.65	0.75	
実践力	3.78	1.46	3.38	1.60	3.45	1.42	1.72	

*:p<0.05　**:p<0.01　***:p<0.001

(2) 部活動の経験

表６に本学科学生の部活動の経験別のリテラシー及びコンピテンシーの得点を示した。リテラシーでは有意な差は認められなかったが、コンピテンシーで差が認められた。〈無所属〉と〈運動部〉、〈文化部〉との間に有意な差は認められなかったが、〈無所属〉はリテラシーで両者に比べ低い傾向を示し、コンピテンシーで〈文化部〉と同等か高い傾向を示した。亀野（2016）[2]の北海道大学１年生を対象とした研究では、部活やサークル活動に取り組んだ学生の方がコンピテンシーの「対人基礎力」が高いと報告しているが、本研究の〈無所属〉は該当数が少なかったため、比較は困難であると考える。

〈運動部〉と〈文化部〉において、「コンピテンシー総合」、「対人基礎力」、その下位項目である「親和力」、「協働力」で有意な差が認められた。岡田（2009）[9]は、部活動に積極的な生徒は学校生活の諸領域や心理適応が高く、友人・教師との関係を築きやすいなどの特徴があると述べている。本研究では〈運動部〉、〈文化部〉ともに活動内容やレベルなどまで考慮していないので単純に比較はできないが、競争的要素の高い運動部で類似の要素が高かったと考えられる。横井（2011）[17]の研究では、運動部のほうが文化部より自己効力感

が高く、それにも役割やレギュラーか否かなど貢献度が影響すると述べている。自己効力感とは自己に対する信頼感や有能感を意味し、コンピテンシーの対自己基礎力の「自信創出力」にあたると考えられるが、本研究では分散分析において群間に差がみられた。

表６　本学科学生の部活動の経験別のリテラシー及びコンピテンシーの得点

項目	部活動の所属別									
	a)運動部		b)文化部		c)両方		d)無所属		F 値	多重比較
該当数	92		63		61		14			
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD		
リテラシー総合	4.65	1.25	4.57	1.32	4.84	1.38	4.14	1.55	1.14	
情報収集力	3.39	1.37	3.51	1.40	3.64	1.32	3.07	1.49	0.80	
情報分析力	3.49	1.29	3.49	1.22	3.31	1.31	3.21	1.47	0.40	
課題発見力	3.83	1.11	4.06	0.81	3.82	1.09	3.43	1.18	1.64	
構想力	3.75	1.28	3.94	1.15	4.07	1.13	3.36	1.67	1.62	
言語処理能力	3.64	1.13	3.40	1.18	3.64	1.34	3.36	1.29	0.72	
非言語処理能力	3.48	1.45	3.41	1.51	3.75	1.39	3.50	1.12	0.66	
コンピテンシー総合	3.20	1.58	2.51	1.26	3.16	1.82	2.86	1.36	2.77*	a>b
対人基礎力	3.57	1.80	2.76	1.38	3.39	1.86	3.14	1.85	2.83*	a>b
対自己基礎力	3.42	1.48	2.90	1.23	3.39	1.52	2.79	1.08	2.41	
対課題基礎力	3.26	1.54	3.16	1.60	3.54	1.67	4.00	1.41	1.46	
親和力	4.17	2.00	3.08	1.78	3.97	1.78	3.64	1.84	4.44**	a>b, c>b
協働力	3.99	1.80	2.78	1.33	3.64	2.02	3.36	1.95	5.93**	a>b, c>b
統率力	2.75	1.63	2.60	1.42	2.67	1.52	2.86	1.60	0.16	
感情制御力	3.26	1.60	2.95	1.56	3.26	1.62	2.86	1.41	0.72	
自信創出力	3.37	1.53	2.81	1.43	3.46	1.63	2.71	1.33	2.78*	
行動持続力	3.43	1.59	3.02	1.35	3.54	1.61	3.29	1.28	1.42	
課題発見力	3.09	1.67	2.98	1.70	3.21	1.56	3.71	1.53	0.81	
計画立案力	3.18	1.62	3.25	1.75	3.66	1.77	3.86	1.55	1.40	
実践力	3.63	1.49	3.30	1.44	3.80	1.61	3.71	1.16	1.23	

*:p<0.05　**:p<0.01　***:p<0.001

(3) 部活動における役割

表７に部活動における役割別のリテラシー及びコンピテンシーの得点を示した。部活動における役割については、「コンピテンシー総合」、「対人基礎力」、下位項目の「協働力」、「統率力」において〈部長・副部長〉と〈一般部員〉の間に有意な差が認められた。部長・副部長経験者は、部員を引っ張ったりまとめたりする力が身についていると考えられる。

三隅（2005）[6]は、自らのPM理論を用いて大学体育会系サークルのメンバーを調査した結果、PM型のリーダーの下でチームワーク、モラル、コミュニケーション、集団会合の評価が高かったと報告している。この理論を用いて、スポーツ集団の主将について様々な研究が行われているが、松原（1990）[4]らの研究では、専制（P）型が最も競技成績が高かったと報告している。ジェネリックスキルに当てはめてみると、目標達成行動はコンピ

テンシーの「対課題基礎力」及びその下位項目、集団維持行動は「対人基礎力」及びその下位項目に近い内容であると考えられる。これを基に考えると、専制（P）型はいわゆる集団維持行動より目標達成行動を重視するタイプのリーダーであるので、本研究における〈部長・副部長〉は、PM理論でいうと温情（M）型の傾向が強いということができるのではないだろうか。

山﨑（2014）[16]の研究では、１年間の学生生活で対課題基礎力の伸びを報告している。本研究における〈部長・副部長〉と〈一般部員〉では、「対課題基礎力」に有意な差は認められなかったが、この年代の部活動では、顧問や教員の指導の下で部活動が運営されることが多いことから、リーダー的な役割を担っていたとしても、「対課題基礎力」に該当するような力を伸ばすことができていないことが示唆される。今後部活動の内容や取り組みを調査し、詳細に調査する必要がある。

表７　部活動における役割別のリテラシー及びコンピテンシーの得点

項目	部活における役割別							
	a)部長・副部長		b)一般部員		c)無所属		F 値	多重比較
該当数	103		113		14			
	mean	SD	mean	SD	mean	SD		
リテラシー総合	4.71	1.37	4.65	1.25	4.14	1.55	1.11	
情報収集力	3.36	1.45	3.62	1.27	3.07	1.49	1.58	
情報分析力	3.47	1.28	3.42	1.28	3.21	1.47	0.23	
課題発見力	3.95	0.97	3.84	1.09	3.43	1.18	1.59	
構想力	3.88	1.18	3.90	1.24	3.36	1.67	1.21	
言語処理能力	3.56	1.20	3.58	1.22	3.36	1.29	0.20	
非言語処理能力	3.58	1.42	3.50	1.48	3.50	1.12	0.10	
コンピテンシー総合	3.25	1.58	2.74	1.58	2.86	1.36	2.85	a>b
対人基礎力	3.67	1.76	2.93	1.64	3.14	1.85	5.03**	a>b
対自己基礎力	3.41	1.35	3.13	1.50	2.79	1.08	1.74	
対課題基礎力	3.27	1.53	3.35	1.66	4.00	1.41	1.28	
親和力	4.12	1.94	3.50	1.88	3.64	1.84	2.78	
協働力	3.88	1.88	3.22	1.70	3.36	1.95	3.66*	a>b
統率力	2.99	1.57	2.41	1.46	2.86	1.60	3.99*	a>b
感情制御力	3.30	1.59	3.05	1.60	2.86	1.41	0.91	
自信創出力	3.39	1.53	3.09	1.57	2.71	1.33	1.75	
行動持続力	3.51	1.43	3.19	1.63	3.29	1.28	1.25	
課題発見力	3.03	1.46	3.15	1.81	3.71	1.53	1.07	
計画立案力	3.23	1.68	3.43	1.74	3.86	1.55	0.97	
実践力	3.67	1.54	3.50	1.50	3.71	1.16	0.37	

*:p<0.05　**:p<0.01　***:p<0.001

４．まとめ

本研究では、本学科2015年及び2016年の入学生の中学・高校時代におけるリーダー経験が、リーダーシップとして身についているかを PROG テストにおけるジェネリックスキルを用いて検討することを目的とした。生徒会活動等、部活動の所属、部活動での役割をリーダー経験として各カテゴリー別に、ジェネリックスキルの項目の比較を行った。

対象学生の特徴として、生徒会活動等では76％が経験者、部活動では40％が運動部、27％が文化部、27％がどちらかまたは両方の経験者、部活動の役割では45％が部長・副部長の経験者であった。このように本研究の対象者は、リーダー的役割の経験が比較的多い集団であった。

ジェネリックスキルのうち、リテラシーに関しては、生徒会活動等、部活動の所属、部活動での役割の各カテゴリーにおいて有意な差が認められなかった。

コンピテンシーに関しては、有意な差が認められた。生徒会活動等では経験者の方が「総合」、「親和力」、「協働力」、「自信創出力」で高い傾向にあった。部活動の所属では運動部の方が「総合」、「親和力」、「協働力」、「自信創出力」で文化部より高い傾向を示した。部活動の役割は部長・副部長経験者が「総合」、「協働力」、「統率力」で一般部員より高い傾向を示した。部活動の所属では運動部の持つ特性である競争的要素が関係していると思われる。生徒会活動等と部活動の役割において経験の有無でみられた差は、「対人基礎力」と「対自己基礎力」であり、中学・高校での各種活動でのリーダー経験は、これらの差を生んでいることが考えられた。「対課題基礎力」に関しては、中学・高校ではまだ能力が身につきにくいことが推察される。

参考文献

1)深山元良（2012）スポーツ集団におけるリーダーシップ研究の展望－特性、行動、状況アプローチの視点から－，城西国際大学紀要，20(1)，129 - 141.
2)亀野　淳（2016）大学入学時のジェネリック・スキルを規定する要因分析：北海道大学１年生に対する調査結果をもとに，高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習，23，71-78.
3)学校法人河合塾，株式会社リアセック（2016）PROGの強化書ver. 5
4)松原敏浩（1990）部活動における教師のリーダーシップスタイルの効果－中学校教師の視点からのアプローチ－，教育心理学研究，38(3)，312-319.
5)三隅二不二（1986）リーダーシップの科学　指導力の科学的診断法，講談社ブルーバックス.
6)三隅二不二（2005）リーダーシップ行動の科学（改訂版），有斐閣.
7)成田秀夫（2014）エビデンスに基づいた大学教育の再構築に向けて－ジェネリックスキルを含めた学修成果の多元的評価－，情報知識学会誌，24(4)，393-403.
8)西島　央編著（2006）部活動 その現状とこれからのあり方，学事出版.
9)岡田有司（2009）部活動への参加が中学生の学校への心理社会適応に与える影響－部活動タイプ・積極性に注目して－，教育心理学研究，57，419-431.
10)大森竹仁，林尚示（2005）生徒会活動を通した集団づくり－リーダーの資質を中心と

してー，教育実践学研究10，95-104.
11)小野善生（2013）最強のリーダーシップ理論集中講義，日本実業出版社.
12)PROG白書プロジェクト編著（2015）PROG白書2015～大学生10万人ジェネリックスキルを初公開～，学事出版.
13)PROG白書プロジェクト編著（2016）PROG白書2016現代社会をタフに生き抜く新しい学力の育成と評価　2020年大学入試改革を見すえて，学事出版.
14)笹川篤史（2015）PROGテスト問題を利用した学生の能力伸長分析について，長崎大学経済学部研究年報，31，1-23.
15)竹林浩志（2004）リーダーシップ研究の発展と課題，大阪明浄大学紀要，4，67-71.
16)山﨑芙美子，眞鍋和博（2014）１年間の大学生活を通じたコンピテンシーの変化－北九州市立大学地域創生学群生を対象としたPROG測定結果からー，北九州市立大学基盤教育センター紀要，20，155-162.
17)横井彩奈（2011）部活動が与える自己効力感への影響－達成場面と人間関係に着目してー，研究新報，60，122-132.
18)吉村　斉（2010）部活動への適応感と競技特性の関係：運動部員の対人スキルと主将のリーダーシップに注目して，青年心理学研究，22，45-56.